

課題

おせつかい

昔映画

青	老	ミ	リ	馬	A	サ	カ	人
年	婆	ヨ	ズ	場	I	ラ	ズ	物
		(13)	(13)	(29)		(33)	(13)	

(	(					
ス	ス	カ	カ	カ	カ	カ
ク	ク	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ
リ	リ	の	の	の	の	の
ー	ー	ク	ク	担	家	母
ン	ン	ラ	ラ	任	の	親
の	の	ス	ス		人	
中	中	メ	メ		工	
)	)	イト	イト		知	
					能	

○ 街中・歩道

腰の曲がった老婆が大きな風呂敷包みを背負い、危なげに歩いている。歩道橋の前で一時止まり、ゆっくり階段を見上げる。老婆の顔には不安げな表情。その時その肩をとんとたたく男性の手。老婆が振り返る。ジーパンにスタジャンを着た男性が老婆に何か話しかける。老婆が深々とおじぎをする。男性が老婆をおぶる。そのまま歩道橋を上っていく。

○ 3 の 2 ・ アドバンスドクラス教室（朝）

教壇の背後に巨大なプロジェクター。男性が老婆をおぶって歩道橋が上がっていく姿が映しだされている。教壇に大きめのカプセルが一つ、一段下がった30平方メートルほどの床には少し小さめのカプセルが20個ほど無秩序に並んでいる。それぞれのカプセルに、

子供が一人ずつ座っている。馬場F7
サトル⁽²⁹⁾ が大きなカプセルの中で話
し始める。

馬場「今見たシーンは、みんな、どういう状
況だと思う？」

馬場のコントロールパネルの横の小
さなスクリーンに「KAZU」の字が点
滅する。

馬場「カズ、答えて見ろ」

点滅しているカプセルの中で、老婆を
おぶった青年の静止画を見ながら、カ
ズ⁽¹³⁾ が口を開く。

カズ「解毒マスクもつけてないしな・・ずい
ぶんと昔？二人は血縁関係に見えないな。
多分犯罪現場だろ！わずかな接触でも逮捕
は免れない。そう思います」

馬場「他のみんなも感じるものがあつたらど
んどん喋ってみろ」

別のカプセルのミヨ⁽¹³⁾ が口を開く。

ミヨ「あたし、おばあちゃんから聞いたんだ

けどね。昔は電車っていう乗り物に知らない人同士がぎゅうぎゅう詰めに入ってたんだってよ。肩とかお尻とか腕とか、胸だつて知らない人と接触してたって」

がやがやとたくさんの声が交錯する中
「うそお・・・」 「信じらんない・・・」
という声が聞こえる。

馬場「静かにしろ！・・・実はこれは犯罪ではなく、逆に温かい行為、『親切』というものなんだ。聞いたことあるヤツはいるか」
シーンとする中、一つのカプセルが点滅する。馬場がパネルを確かめ

馬場「リズ、言ってみろ」

リズ「相手のことを考えて、相手の喜ぶことをする。このおばあちゃんが階段上がるの大変そうだからってこの男性が助けたってこと・・・」

馬場が上機嫌でコントロールパネルを操作し、最後にピンクの花丸がてっぺんに描かれてある大きなボタンをポン

とたたく。リズの画面に大きな花丸が点滅する。

馬場「さすがだな。読書しているヤツは違うな」

リズが点滅する花丸を冷たい目で見ながら続ける。

リズ「先生、この前昭和時代の小説を読んでいたら「おせっかい」って言葉が出てきました。・・親切とおせっかい、実に境界線が危うい・・というセリフがあつて・・」

馬場がウツと言葉に詰まり焦った表情をする。

馬場「よし、それが今日の宿題だ。親切とおせっかい。どう違うのか・・いつも言うが、人工知能を搭載している家は彼らに頼らないように。自分の脳みそ使わないと、若いうちから入れ替え手術が必要になるぞ。では解散」

小さなカプセルが一斉にスルスルと動き出す。それぞれがまったくぶつかる

ことなく最短距離を取って教室の外へ出ていく。

○カズの自宅前

黒ずんだ空。木々は枯れ、緑は見当たらない。その中をカズを乗せたカプセルが通る。窓の全くない真っ黒の建物の前にカプセルが止まる。カズがコントロールパネルを操作する。玄関が開く。カプセルカーが入る。扉ががっちり閉ざされる。

コンピューターの声「ただ今室内空気を浄化中。今しばらくお待ちください」

玄関の壁にあるパネルが50%70%数字を増やしていく。100%に到達する。

コンピューターの声「室内空気浄化完了。お疲れ様でした」

カズがカプセルカーから出てくる。

○カズの自宅・リビング

カズの母親サラ (33) がタブレットで調べ物をしている様子。カズが入ってきて来る。

カズ「ただいま」

サラ「あ、カズお帰り。久々の学校はどうだった？」

カズ「家で授業受けてんのと変わんないよ。

これで8回終了。今年は後2回だな」

サラ「もつと行けばいいじゃない。何もぎりぎりじゃなくても」

カズ「大気汚染が殺人的じゃない時になら」

サラがタブレットをタップする。

サラ「ハンバーグ作ろうと思ってさ。クッキン
グロボットに今日はお休みあげて、私の
この手でさ・・・」

カズ「わざわざ？どうして？そんなの面倒で無意味じゃん。なんかちよつと嬉しいけど」

サラが顔を上げずにちよつと微笑む。

カズ「ところでさ、ママ、おせっかいって言葉聞いたことある？」

サラ「大世界？大きな世界のことかな？」

カズ「だめだな・・・」

カズがサラをたしなめるように右手を上下に軽く振って部屋を出ていく。

○カズの自宅書斎（人工知能の部屋）

カズが部屋に入った途端、壁に大きなスクリーンが現れ、そこに映しだされた緑色のカエルが、落ち着きのない動きをしながら話し出す。

A I「カズさん、おかえんなさいまし。久しぶりの通学は doesn't でっしやる？」

カズ「ママと同じ様なこというなよ。ママが二人いるみたいじゃないか」

A I「それは失礼いたしやした。何かお手伝いできることはあらしまへんか・・・」

カズ「お前、何か今日言葉変だな？遊ぶなよ。僕で。宿題があるんだ。でもお前に頼るなんて先生が。親切とおせっかいの違いだつてさ。わけわかんないし・・・かつたるいわ」

スクリーンの中の緑のカエルが、「考える人」のような素振りをする。

カズ「いいって。自分で調べなきゃだめなんだって」

A I「さいですか・・かしこまりました」

カズ「とりあえずさ、昭和時代の人情映画って言うヤツ探してスクリーンに出して。それならギリOKでしょ」

スクリーンの中のカエルが消える。スクリーンがずんと拡大され、そこに

「男はつらいよ」という大きなタイトルが現れる。カズが真剣な表情でスクリーンを見ているが、すぐに居眠りし始める。

○同・リビング（朝）

サラがコーヒーを飲んでいる。せわしない足音の後にカズがリビングに入ってくる。

カズ「僕ハンバーグ食べてない！おかしいよ、

何で朝なんだ」

サラ「やあだー、起こしたわよ何回も。爆睡してたから。ね、あの目が小っちゃくてエラの張った、胴体の一部だけぐるりと色が違うのは何？スクリーンに映ってたヤツよ。あの幅太ボーダー、流行るかもね」

カズ「知らねーよ」

サラ「ハンバーグ残してあるわよ。食べる？」
カズ「いや、あと五分で一時間目だから」

カズがリビングを出ていく。

○カズの部屋（朝）

スクリーンに馬場のアップが映し出されていく。

馬場「おはようおはよう。そうかつ・・・今日はカプセル通学は7名か・・・さみしいな。みんなもつと来てくれよ。ま、しょうがないな・・・さてみんなの宿題をチェックさせてもらったんだが・・・」

カズが「まずい！」というように顔を

しかめる。

馬場「みんな、なんだかんだ言って結構まじめじゃないか。感心感心・・・おっ、カズ、お前特にすごいな。⁴⁸ 作品もある昔映画の場面を引用するなんて。これはこの前勉強した『粹』ってやつに近い行為じゃないか？」

カズがぼかんとしている。

馬場「ただなカズ、最後の一行がどうもわかりずらいんだが説明してもらえるかな」

カズがあせってコンピュータを立ち上げる。学校との共有ホルダーに、「親切とおせっかい」というタイトルの後、6ページのレポートが続いている。カズが手早くスクロールして最後の行に行きつく。カズの口があつという形になる。

宿題の最後の行（A Iの声）「するなと言われたのにしてしまった。何を隠そう、これこそがおせっかい」